明日へ向かって
第３学年　学年だより
令和５年　７月５日
第２７号

高等学校受験についての基礎知識①

高等学校受験

私立高等学校

・経営母体が主に学校法人等。
・創立者の「建学の精神」や宗教など、各校個性的な教育をしている場合が多い。
・女子高、男子高も少なくない。
・レベル別クラス編成や大学受験教科の学年先行授業等の特色がある。
・主に普通科で、職業科はまれ。数は少ないがコースを設けている場合がある。
・生活指導面では宗教や情操教育などに基盤においた指導やしつけに厳しいところが多く、制服や髪形なども厳しい規定がある学校が多い。
・進路指導では、公立では難しい徹底した大学進学指導をする学校が多くある。
・就職指導などでも施設設備や資格取得に力を入れたり、礼儀・マナーの徹底指導を行う学校が多い。

●入試得点の扱い等

・内申点は素点で扱う。
・内申と当日の学力検査の点数との配分なども各校独自。
・国語、数学、英語の３教科受験が多い。
・推薦試験は内申素点と面接だけの学校が多いが、作文や実技試験を行うなど独自性も見られる。
・高校によって部活推薦などがある。
・内申を見ないで、当日のテスト点数のみで合否を決める学校もある。大学付属校や難関校に多い。
・最近は埼玉県私立だけでなく、多くの私立で、親子で入試相談に行くことでおおかたの合否が決まる場合もある。
学校によって模試の偏差値や、２年生の時の内申を求められ、それで合否が決まる場合もあるので、必ず親子で入試相談に行くようにする。

●試験や難易度、その他

・日本全国、どこの私立も受験できる。
・超難関校から、比較的入学しやすい学校まで差が大きく、選択肢がある。
・公立との併願を認めている場合が多い。
・推薦枠の拡大によって一般受験はのきなみレベルが上がっている。
・少子化の影響もあり、全体的にレベルは両極化の方向に流れている。
・試験日が学校独自で、複数校の受験が可。
・私立同士の併願については、学校に問い合わせておいた方が良い。

公立高等学校

●特色

・経営母体は都道府県など地方自治体。
・各地方自治体の教育方針に基づいた教育がなされる。
・ほとんどが共学校。
・普通科の場合、１・２年次では共通で３年次になって文系・理系に分かれたり、多少、個別進学指導などが入る場合もある。
・普通科の他、総合学科や様々な職業科がある。
・全日制課程と定時制課程がある。
・生活指導面では、古くからある学校では規則などゆるやかで自由。服装も私服のところがあるなど、ほとんどの場合本人の自主性に任されている。近年では厳しい学校も見られる。
・進路指導では、どの学校にも工夫は見られるが、基本的に生徒本人の努力に任されている。
・就職指導などは、職業科の就職率が高く、就職後の定着率も高い。

●入試得点の扱い等

・内申点は実技４教科を２倍にした換算内申を用いる。
・一般試験は、一次募集で内申３：得点７の割合。
二次募集で内申４：得点６　定時制はまた異なる。
・推薦試験は内申、面接、作文又は小論文
高校によって実技を課すところもある。
比率は入試要項によって発表される。
・高校によって文化・スポーツ等特別推薦を実施する。
・一般推薦と文化・スポーツ等特別推薦は、同一校で併願できる。
・基本的に、総合得点を何点以上取れば合格するといった基準を明確に示されるわけではない。あくまでも基準は予測でしかない。

●試験や難易度、その他

・都内在住の者は都立学校は自由に受検できる。
・以前は学区制があった。
・試験問題は基本的に全校共通問題。
・進学指導重点校、進学重視型単位制高校、併設型中高一貫教育校は、独自問題を導入できる。一般問題に比べ、ハイレベルな問題が多い。
・一般試験については、一度出願した高校を取り下げ、別の高校に志願変更ができる。なお、できないケースもあるので、確認が必要。

国立高等学校

●特色

・国立大学の附属高校であり、個性的な教育を行っている。
・数は少なく東京都では７校。少人数制で学習面での個人指導や成績管理も徹底している。専門性が高い内容についての指導も確立している。
・生活指導面では生徒の自主性に任されてはいるが、生活規律については厳しく、ほとんどが制服着用。
・進路指導は、普通科では大学進学を前提としており、本人の個性と適性を重要視した指導がなされる。

●入試得点の扱い等

・受験教科については学校独自。調査が必要。
・内申と学力検査との配分も独自。
・実技試験があるところはその試験結果がかなり重要視される。
・基本的に、総合得点を何点以上取れば合格するといった基準を明確に示されるわけではない。あくまでも基準は予測でしかない。
ただし、かなりハイレベル。

●試験や難易度、その他

・地域制限や通学時間制限を設けている高校もある。
・どの学校も出題傾向に独自性が見られ、かなりハイレベル。

高等学校受験についての基礎知識②

■推薦制度と一般入試

卒業後の進路に高等学校進学を考えた場合、実際の受験にはいくつかのパターンが考えられます。例を挙げると次のようになります。

（１）**都立高校だけを受検する**
　　様々な理由で、私立高校に進学することが厳しい場合
（２）**私立高校だけを受験する**
　　ある目的があって、その目的に応じた私立高校を何校か受ける場合
（３）**都立高校に行きたいが、私立高校も受験する**
　　都立高校が万一不合格だった場合、私立を第二志望にしておく場合
（４）**私立高校に行きたいが、最終的に都立も受検する**
　　受験した私立高校全てに不合格で、最後に都立を受検する場合

いずれの場合も、高等学校をはじめとする上級学校を受験するのには、「推薦」と「一般」の二つの方法があります。

しかし、同じ「推薦」「一般」という名称であっても、その種類はいろいろあります。特に都立と私立の場合では、合格基準や考え方に違いがあります。混同しないように注意する必要があります。また都立と私立を受ける場合にも、考えておきたい点があります。

●都立高校の考え方

都立高校は、「中学卒業後も勉強をしてさらに高度な知識を得たい」「高校生活を送る中で、人間関係などの社会性を身に付けたい」「あまり経済的には裕福ではないが、高校卒業の資格は取っておきたい」などとする人たちの、いわゆる「都民の受け皿」としての役割があります。

従って、各学校で様々な学力のレベルを設けて都民に広く門戸を開き、学習を深めやすいように同レベルの生徒を集める必要があります。

また、「手に職をつけたい」「専門的な勉強をしたい」と思う人のニーズにも応えるために、たくさんの学科を用意していますし、最近では「高い学力を得てより高度な勉強をしたい」「目的の大学に入るため高校のうちから高度な学問を教わりたい」というニーズにも応えようとしています。ですから、学力だけにとらわれず、中学校時代の活躍の様子や生活の様子、授業での頑張り具合などを、入試の合否判定の一部に加味、参考にしています。（内申書、自己ＰＲカードなど）

■私立高校の考え方

私立高校は、もともと「こういう教育をしたい」「この意志（建学の精神）に賛同してくれる人が欲しい」という考え方があるため、広く門戸を開くという意識はありません。

「学力が高い」「人間関係を良好に保てる」「スポーツや芸術などで活躍」「福祉・奉仕に興味がある」など、その高校の求める人材を合格させるというのが入試の目的です。

また、受け皿としての設置意図はありませんから、入試の合格にもある一定レベルの学力が要求されます。したがって職業系の私立高校はほとんどなく、教育の中身や施設などで特色を出し、独自の教育を展開するために生徒を募集します。運営に必要な資金は授業料によって賄われています。生徒数の減少や評判の悪化はそのまま営業不振に直結しますので、様々な工夫をしています。

■合格基準の違い

	推薦試験	基準や合格予想ラインの比較	一般試験
●都立高校	●各高校が示す「本校の期待する生徒の姿」の基準を満たしていると高校が判断した生徒を入学させる。 ●推薦で優秀な人物を集めたいという意図があるため、合格予想ラインは同じ高校の一般試験よりもかなり高い。 ●「内申」「面接と集団討論」「作文や小論文」「実技」などが得点化され、各校が定める合格ラインに到達した場合に入学候補者となる。	**推薦** の方が高い ＞	○「換算内申」「当日の得点」によって主に合否判定される。（総合得点という ○どの程度の総合得点で合格するかという基準も高校に任されている。 ○合格のラインは高校によってかなりばらつきがある。 ○内申点と検査点比率は一次試験の場合３：７ ○特別な意図を持って生徒を募集する高校では自校作成問題（グループ）を課す高校もあるが、それ以外は５教科で各校共有の学力検査問題になる。
■私立高校	■本校を第一に希望するという生徒のための制度であるので、これに合格した場合は他の高校は受験できない。 ■本校に入りたいという意図を重視するため、推薦での基準は、同じ高校の一般試験よりもやや低い。 ■「内申（素点）」「面接や作文」といった判定材料になる。	**一般** の方が高い ＜	□都立や他の私立を同時に受験している生徒が多いと判断しているため、合格基準は同じ高校の推薦よりも高めに設定されている □科・コースで合格基準を変えている学校がほとんど □内申点と当日の試験点の比率や扱いは高校独自の基準になる。 □様々な受験形態がある。３教科や２教科、５教科から２～３教科を選択させる学校もある。